

(講演)

フランスの図書館・文書館で考えたこと

瓜 生 洋 一

(大東文化大学法学部教授)

ただ今ご紹介にあずかりました、瓜生でございます。今日ご参加の方々のお名前を拝見しておりますと、私が日ごろお世話になったり、あるいはいろいろなことでお力添えをいただいた方ばかりでして、大変名譽に存じますし、またこれからお話しすることが、何か皆様にお役に立てばというつもりでお話ししたいと存じます。

ただ今、過分なご紹介をいただきました。私自身がこれまで、かれこれ30年近くにわたってフランスに参り、文書館ですとか、図書館ですとか、をずっと利用してまいりました。そのような場合に当然先達がおられまして、歴史学の分野で申しますと、もう40年ぐらいになりましょうか、東大の柴田三千雄先生が『史学雑誌』に、国立文書館の話を書いてくださっておりまして、私どもは大変助かった面があります¹⁾。しかし、その頃とは今やすべての面で大きく変わっております。

そのような意味で結論的に申し上げますと、日本でできることは日本で行ったほうがいい。フランスでしかできないことは、フランスに行ってやるしかない。このようなごく当たり前の結論に、今さらのようによく到達しているところです。皆さんは、図書館にかかわっていらっしゃる方ばかりですから、どの程度私の結論がお役に立てるかどうか分かりませんが、今日の話は、いろいろな角度から、まずフランスにおける図書館と文書館のお話をいたそうと思います。

1) 柴田三千雄「フランスの文書館」『史学雑誌』75巻6号、1966年6月、pp.79-86。

まず先ほど申し上げましたように、今や日本でもできることが結構あります。私が今日皆さんの前でこのようにお話をするこの最大の目的は、もし皆さんのところにどなたかが相談に来られて、今からフランスへ本を探しにいくのだけれども、どのようにしたらいいのだ、という相談があった場合に、皆さんが私の申し上げることをちょっと思い出していただいて、アドバイスをしていただくと、向こうへ行っからの進度が大幅違うのではないかと思います。そのようなことで、老婆心ながらのお話になると存じます。

今日、皆さんのお手元に2枚の紙を配っておりますが、その1枚目の左側のほうにフランスの図書館・文書館で考えたことということで表題がございまして、はじめにということです。1番目が、利用するとき、なにが一番重要か。2番目に利用者にどんなアドバイスをするか。これは私のアドバイスであります。3番目が現在、日本でもできることです。次にフランスに行っていなければならないこと。この二つがかなりネット上の図書館ということで、はっきり分かってまいりましたので、そのことをちょっとお話ししようと思います。

最後にBNFと書いてあるのは、フランスの国立図書館のことです。そしてポンピドゥーセンターという、BNFとは非常に対照的な図書館でもあり、また美術館でもあるポンピドゥーセンターがあります。これはあとでちょっとお見せいたしますけれども、非常に不可思議なる複合体なのです。私はこれがフランスの中で非常にうまく機能しているということを、日ごろから感じておりました。要するにBNFとポンピドゥーセンターとの分業と有機的な結合ということです。将来、日本で図書館像ということを考える上で、必要になってくるのはこのようなことではないか、という気がしております。もちろんそれぞれの研究体で、いろいろな形で対応されているだろうと思いますので、全国的な議論よりも、まず皆さんのそれぞれ自分のところで議論するというのが一番大きいと思います。そのような場合、将来的には何らかのネットワーク的なものになっていくのではないかなというように気がしております。その点でフランスで考えたことを結論のところでお話ししようと思っております。

参考文献といたしまして、赤星さんの『フランス近代図書館の成立』

という本です。それからブラン＝モンマイユールなどの『フランスの博物館と図書館』、これはポンピドゥーセンターのことがテーマになっています。もしご興味がありましたら、私の不正確な紹介よりもこれをお読みになったほうがよろしいかと思えます。この4点にわたりまして、雑ばくなご報告を申し上げようかと思っております。

はじめに、私がフランスの国立図書館を最初に利用したのが、1977年でした。すでにその前に、私はフランスの国立図書館というものはどのようなものかということを、ちょっと調べたことがありまして、それはいろいろなところに書いてあったものをかき集めてきたものでした。その後でこの本があったということに気がつきました。それはそこにございます『米欧回覧実記』という本です。これは皆さんご存じの方も多いかと思いますけれども、久米邦武という人がまとめたものです。明治4年から2年近く岩倉具視の使節団に随行しまして、いろいろな記録をまとめ上げたものが、『米欧回覧実記』という形でわたしどもの手に入わけであります。

この『米欧回覧実記』では、フランスにまいりました岩倉使節団が、いろいろなところを視察して回っております。その中で「巴黎大書庫」というところが出ています。これは要するに Bibliothèque nationale フランス国立図書館のことです。①と書いてありますのは、その右側のほうに大変読みにくいものでございますけれども、この「巴黎府ノ記」というものの中に出てまいります、その大書庫の記録がここにあるわけです。実はこれは現在のものではございません。後で申しますけれども、現在新しいところに移っております。ここは古い Bibliothèque nationale についての記述であります。

これは1871年のことなのですが、何月かというのは書いておりませんが、大体1月か2月ぐらいだと思います。一行は、この大書庫に行ったわけでありまして、そこの2、4、6、8行目のところに傍線を引いておりますが、「此庫ハ、政府ヨリ公税ヲ以テ蓄ヘタルモノニテ、借覧ノ人ヨリ、借料ヲ収メスシテ、縦観セシム」という、つまり無料であるということです。そして公開されている。明治4年のころのことを考えていただければお分かりだと思いますけれども、まだ幕末維新の戦塵が治まらない殺伐とした中で、この図書館を見て

非常に感銘を受けたということがよく分かるわけです。

非常に詳細に、この図書館のことについて書いてありますが、その中で、なぜそのように感銘を受けたかというところが重要であります。「此庫ノ奥ニ、各国ノ書ヲ蔵スル一廊アリ、支那書、印度書、緬甸書、亜刺伯書、波斯書ナト、ミナ備ル、日本書ノ棚モアリ、其内ニ、慶長年間ニ翻訳セル、『キリシタン』教<即天主教>ノ書アリ」、云々ということで、日本にも無いようなものがここにあったということでびっくり仰天しているわけです。

私はその着目の点で、この岩倉使節団というのはすごいなということとを一方で思いつつも、実はその次のところに、後半のところに1段下げて、これについてのコメントが書いてあります。おおむねこれは久米が書いたものなのですけれども、これに私は非常に注目したわけです。どのようなことかと申しますと、「西洋ノ日新進歩ノ説、日本ニ伝播シテヨリ、世ノ輕佻慮り短キモノ、逐逐然トシテ、旧ヲ棄テ新ヲ争ヒ」、つまり文明開化だというのが古いものは全部捨ててしまう。新しいもの、新しいものとみんな追っかけている。しかしそれでいいのだろうかということを論じ、文明論に入ってしまうわけです。

そして、「殊ニ西洋各地ノ民ハ、物ヲ廃棄スルニ渋シ」と書いてあります。私は非常に良き文化論ではないかと思うのです。つまり西洋の人たちというのは、明治4年のときの私たちから見ればモデルであり、追いかけてそれを追い越していかなければならないと考えるのは当然です。新しいものをどんどん取り入れないといけないと思ひ込んで行ってみたら、実はそうではない。西洋の人々は古いものを捨てない。じっとそれをため込んでいる。そのため込んでいく中で、だんだんその文明がようやく進んでいくのだ。このような文明観、文化観を得るわけです。

つまり、国立図書館に行つて、その蔵書のすごさ、このときは300万冊と言っております。現在は1,000万冊に上っておりますけれども、そのすごさということに着目するのみならず、それが日本の進路に当たつてどのような方向性を取るべきなのかということまで考えているということが、私は非常にすごいというように思いました。次に「西洋ノ能ク日新シ、能ク進歩スル、其根元ハ愛古ノ情ニヨレリ」という

わけです。やはり古いものを非常に愛する、大事にする。それが出発点にある。これはその集積体がこの国立図書館なのだというような、そのようなことを言っているわけであります。このことにつきまして、また後で若干触れたいと思います。

さて、現在パリにおける図書館の中で、私が使ったものの代表的なものだけを挙げておきました。それが②のところにございます。Bibliothèque nationale de France という図書館で site François Mitterrand と書いてあります。これはフランスはミッテラン名称フランス国立図書館というのが正式名なのです。ですから、私はフランス人というのはまだ権威主義的だなど、いつもここに行くたびに思うのです。敷地が約 7.5 ヘクタールありまして、周囲が約 1,300 メートルです。大体長方形をなしております。中央庭園というのが地下にありまして、これが 1 万 2,000 平方メートル。床面積が 35 万平方メートルありまして、後でちょっと写真をお見せしますが、タワーが四隅に 1 棟ずつあります。高さが 79 メートルあります。

このタワーは本を直角に広げたような L 型のガラスタワーで、中央には長方形の中庭が取り込まれ、その周囲に閲覧スペースが配置されております。Rez-de-jardin とは、これは研究用のスペースでありまして、ここは一番下なのですけれども、閲覧スペースが 14 室ありまして、座席は 2,000 席あります。2 階がこれは一般用で、大体学部学生以下向けで、10 室ありまして、座席は 1,600 席あります。全体の蔵書数は約 1,000 万冊、定期刊行物が 35 万種と言われております。世界でも有数の図書館であります。

スライドをご覧ください。これが国立図書館です。セーヌ河の反対側から、新しい大蔵省の側から見た絵でありまして、今ありましたように本を広げた格好でというのは、ここでお分かりいただけると思います。そのタワーが「時のタワー」とか、それから「数のタワー」、あるいは「文字のタワー」という、それぞれ名前がついております。このスライドを見ますと、私どもはこのタワーで読書するのかもしれないと思います。そうではないのでありまして、ここは蔵書が収められているタワーであり、また管理部がここにいます。職員の子どもたちのための保育所までちゃんとあります。

後でちょっと申しますけれども、この図書館へのアクセスは非常にづらいというのが率直な意見です。入り口に行くのにこのように木の階段を登らなければなりません。私が行った日も雨だったのですけれども、冬でないのが幸いでありました。冬に雨が降って凍りますと、ひどく滑りやすいのです。セーヌ河のほうから、すごい風が吹き上げますから、私などはまだ何とかもっていますけれども、女性の方などは吹き飛ばされそうになって、えらく評判が悪い階段なのです。何か知のピラミッドへ登っていくという感じであります。ともかくえんやらえんやら登っていかないといけないというようなところであります。

これが、ずっと下がっていくのですから、1階とは言いにくいのですけれども、地下1階のような感じのところですよ。ここが一般用のところでありまして、それぞれ2カ所、受け入れ機関がありまして、ここで利用証を発行してもらいます。これは後でちょっと説明をいたします。

さらにこれからもう1階地下に下りますと、ここが先ほど言いました Rez-de-jardin というところでありまして、ここに中庭があり、木が植わっています。この中庭のまわりの回廊に専門領域に対応した区画があります。このLというところが歴史系の区画であります。だんだん体が慣れてくると楽なのですけれども、当初はよく分からないことが多かったということが多々ありました。そのようなことは今の若い人はどんどん気楽にやっていくのですが、私の年齢の者にとっては空間感覚などが怪しくなってきますと、ちょっとしんどいことがたくさんあります。

これが中庭で、このように木が植えられています。この中、ここが一般用で、下が研究者用なのです。回廊を時々散歩してもいいのですけれども、長い長い回廊でありまして、ちょっと大変は大変です。中庭には出られないのです。ですから、あまり自然の中で勉強しているという雰囲気ではありません。

次が、ポンピドゥーセンターについて、お話ししたいと思います。ポンピドゥーセンターは大変有名ですので、皆さんもよくご存じだと思います。とんでもない工事現場のような、あるいは化学工場そ

のままのようなところでして、ここがエスカレーターです。これはポンピドゥーセンターの近所にあります、ちょっとした街角の泉です。いろいろなオブジェがあります。子どもたちがよく遊んでおります。1977年オープンし、2001年に新装オープンいたしました。有名なのは近・現代美術作品でありまして、グラフィック・アートだとか、建築だとか、工業デザインだとか、写真とか、映画フィルムだとか、そのようなものをたくさん持っております。

特に現代美術に関しましては、5階と6階でありまして、展示スペースは1万4,000平方メートル、所蔵品が4万5,000点です。常設展示が1,400点もあります。大変なコレクションを有しています。今日のお話との関係で注目していただきたいのは、ポンピドゥーセンターには公共情報図書館というものがあります。しかもこの図書館はまさにマルチメディア型の巨大図書館でありまして、1日1万人以上が利用しております。「あの本を読まないフランス人が」とよく言われるのですけれども、やはりすごい利用率であります。

床面積が約1万平方メートルで、閲覧席は2,000席。蔵書が35万冊です。もちろん国立図書館に比べれば少ないですけれども、全部開架式になっておりまして、いつでも本を取ってどのようなものかを見ることができます。そのような意味で、まさに一般利用者向けに作られたものです。しかも本だけではなくて、美術であるとか現代アートであるとか、あるいは映画であるとか、様々なメディアを組み合わせでいろいろな催しもやっているわけです。このポンピドゥーセンターは非常にユニークな存在でありまして、後でお話しますが、実はこれは国立図書館のある部分が分かれていったのです。先ほど申しましたように、一方にはこのようなポンピドゥーセンターがあり、他方には国立図書館といった専門的な研究者たちのための図書館があるということ、頭に置いていただければと思います。

実際に国立図書館を利用するときに何が一番大切かということが重要です。先ほど武者小路先生にご紹介いただきましたように、私自身のホームページにも書いているのですけれども、ガイドブックが必要不可欠です。しかし、大変申し訳ないのですけれども、図書館関係者とか図書館専門家は、大体その国立図書館はどのような経緯で作られ

たかとか、そのようなことには大変筆を多く使われますけれども、一体どのように自分の欲しい本を探し出すかというようなことについては、あまり書いていただいていないのです。たとえ書いていただいても、割とうまくいったときの話が書いてありまして、実はうまくいかないことのほうが多いということです。そのようなことをちょっとお話ししておこうと思います。

ガイドブックが必要不可欠である。ただし、今のところ存在しない。あるとすれば、まだここを利用した人たちの頭の中にあるにすぎないのではないかと思います。一言で言うならば、迷宮のようなカフカの状況。まさにどこが入り口なのやら、どこからどう入ったら本にたどり着けるのやら、よく分からないという状態があります。ですから、私は1989年の設計思想と書いていますけれども、このようなバカでかいものを作ったのがミッテランの時代であります。そのときに美術家たち、あるいは建築設計をやった人たちが、自分の美的感覚に沿ってワーッと作ったと思うのです。しかし、そこにまさに欠けていたのはユーザーの視点です。それらの施設を使われる側から見ると、冬になってあのようなツルツル滑るところを、えっさかほいさか登られるなどということを、設計図を引いた人はだれひとり考えていなかった。

これは今のところは、フランス国立図書館の話だけをいたしましたけれども、実は国立文書館のほうもそうなのです。この文書館も1990年代に新しい建物が出来上がりました。素晴らしいものができました。ところが問題の連続でして、あるときに私の友人が仕事をしていたらドサッとすごい音がしたので何だろうと思って見たら、天井が落ちてきたとか、すごい話があるわけなのです。どうもこの時期はフランスが気張っていろいろなことをやっただけでも、一番大事なことを忘れていたのではないかという気がします。その証拠には、国立文書館はいろいろ問題が起こったので、現在そこは閉鎖されておりました。この秋にはまた別のところに移動するという話になっております。これまたユーザーにとってはえらく迷惑な話なのですけれども、そのようなことが次々と起こります。

それから、図書館に関係することで申し上げますと、公開をするで

あるとか、無料であるとかといったことと、利便性と資料保存、管理という問題。これは本当につばぜり合いでありまして、一番難しいところに来ていると思います。つまり、先ほど申しましたように、ちょっと研究しましょうということで行っても、ちゃんと見せてくれます。それはよろしいのですけれども、しかしそれに伴っていろいろな問題がといえますか、負荷がかかってくるわけです。

それからいろいろなことで、つらい思いがあります。ちょっと次のページの③というところを見ていただきたいのですが、実際にどのように行けば目的の本に到達するかということを、1ページちょっとで書いています。これは皆さんがご覧になると、お前は誇張しすぎるのではないと言われるかもしれませんが、実はこのようなところが全然書かれていないものですから、みんなが苦勞するわけなのです。その点をちょっとお話ししたいと思います。このことにつきましては、後で詳しくお話ししますので、2のところへ行きたいと思います。

利用者にどんなアドバイスをするか。つまり皆さんの利用者が、今度私はフランスに行くのだ、このような文献を探したいということを、皆さんのところへ相談に来られたといたします。そのときに、私がもし皆さんの立場だったならば、このように言うだろうと思うのです。まず、第1にすべての予断と偏見を捨てよ。これはどのような意味かといえますと、フランスは文明国である、だから非常に便利な国である。だからあつと言う間に、まるでマジックのように本が出てくるだろうと思い込むことは、すべて捨てたほうがいい。これは第1番目の問題です。それから2番目は、フランス人は親切だろう。これは相当割り引いたほうがいい命題であろうと思います。ほぼその逆であると思っていたほうが、まだましかなという気がいたします。時々すごく優しい人がいると、まるで地獄に仏のような気になるぐらいであります。あまり言いますと、フランスに対する偏見を逆に与えかねません。いろいろな人がいるということを、ちょっと頭に置いていただきたいと思うのです。一律の議論はできないということです。

2番目に *Après vous!* の精神ですね。つまりお先にどうぞの精神で行ってらっしゃいと言うでしょう。どのようなことかと申しますと、

やはり最初は分かっているつもりでやってみても、よく分かっていないことが多いのです。ですから、先にフランス人らしき人に、お先にどうぞということで行ってもらって、観察しておくのです。そうしますと、あまりストレスを感じなくてすむ。日本にいるつもりで、ドンと飛び込むといろいろなところでトラップがありまして、たちまちストレスを抱えてまいってしまうということでもあります。

3番目にしつこく聞く、しつこく主張する。簡単に「とにかく分かった」というのでは駄目なのです。よくよく聞く。手順をよくよく聞くのです。場合によってはメモを取る。また、うまくいかないことが時々起こります。これはフランスで一般的なのです。その場合でも決して「そうですか、分かりました。じゃあ、私はあきらめます」と言うてはいけないのです。これはしつこく主張する。私は正しい。お前は間違っているということを、たとえ自分が間違っているかなと思い始めても、主張しないとイケないということです。これぐらいの根性で当たっていかないと、大変だろうと思います。

それから最後に、私は皆さんの立場だったらこう言います。不可欠の情報を事前に得ておいてください。1番目、ストライキです。これはよくあるのです。特に図書館のほうはよく起こるのですが、図書館もあります。以前、図書館の門のガンガンとたたいて、「昨日おれがイギリスから電話をしたとき、そんなことは一言も聞いてないぞ!」と言って、門をたたいていた人も見ました。そのようなことを言っても、フランス人は「ああ、そうですか、でも私たちはこのようにやっているのです」。しかもストライキというものがまたいろいろありまして、まとめてストライキをやる場合もありますけれども、部門ごとのストライキがあります。フランスは産業別組合ですから、例えば窓口が動かないとなると、ほかのところが動いていても、あるいは扉は開いているのですけれども、中へ入ったら全然サービスがないとかが起こります。私が先ほどカフカの状況と言ったのはそのようなことなのでありまして、まずストライキが起こる可能性はないのかということ、向こうにフランス人のお友達がいたら、一応聞いたほうがよろしい。

それから必要書類です。これも行けば何とかなるだろうといっても、

そのようなわけにいかないことは皆さんもよくご存じのとおりです。図書館によその大学から来ましたと言われたら、当然、「紹介状がありますね」ということになると思います。それと同じことが起こります。それから図書館がオープンしている時期。みんな思い込みがありまして、フランスは夏休みを取るだろうという常識があるでしょうけれども、夏休みは開いているのです。ところが曝書の時期がありまして、この時は閉じるわけでありまして。それはちゃんとインターネット上に書いてありますので、やはりそれをちゃんと確認して行かれたほうがいいだろうと思います。ですから、ストライキと曝書だとか、そのようなお休みのときをかいくぐって、必要書類を持って飛び込んでいくと、このようなことを私だったらお話しするでしょう。

次に時間の問題です。この時間とは、開館時間とか閉館時間なのです。開館時間は、今は国立図書館のほうは問題はないのですけれども、国立文書館は経過的な措置がとられて、88席しかない旧館でやっているのです。夏休みには全世界から押し掛けるわけですから、どのようなことになるかお分かりになられると思います。そのような場合、やはり早くから行って並んでおくということも必要になってまいります。ですから、開館時間をよく確認しておかれたほうがいいだろうと思います。私だったら、そのようなことをアドバイスするだろうと思います。

国立図書館では、入り口からエスカレーターで降りていき、受付で利用証を作ってもらうのです。その上で、さらにエスカレーターで地下に降りていきますと、それぞれ区画に座席があります。ここにみんな勝手に座れません。まず最初に、座席を予約しないといけないのです。これがないと研究階（地下）に入れないのです。入り口は四隅にありますけれども、ここへ入れない。そのことが分からない人は本当に困っていました。ですから、私がカフカの状況と申し上げるのは、このようなことでありまして、入り口は見えているのですけれども入れないという、どうやって入るのだ。開けゴマが分からないわけです。

これについて、皆さんに今から申し上げますので、ちょっと見ていただきたいと思います。③に図書館での実際行動と書いてあります。これは本当に必要なのです。その中でまずアクセスのところですから

ども、ともかくバスで行きなさいということを申し上げたい。確かに地下鉄で Bibliothèque という駅がありますけれども、ここで降りますと延々と歩かされるのです。何を考えてこのような駅の名前をつけたのだと言いたくなるようなことになっています。現在、この一帯が全部再開発地域でありまして、まだまだ図書館だけがポコンと建っているような状況でありまして、この辺りはちょっと殺伐とした感じがします。

ともかくバスで Quai de Mauriac というところで降りまして、先ほど申しました木の階段を登ります。登りますと、下に降りるエスカレーターがあります。そのエスカレーターの前にちゃんと人が立っておりまして、「あなた、ちょっとかばんの中を見せてくれ」です。これはコントロールですね、必ずやります。まず第1回目のコントロールです。何遍もやります。次に動く歩道のようなエスカレーターで降りていきます。下り終わると、今度はいよいよ本当の入り口があります。またここにコントロールがあるわけです、「かばんの中を見せてください」。かばんの中を見せます。爆弾とかバズーカ砲を持っていたら、それはとっ捕まるでしょうけれども、われわれは、そのようなものは持っていないということを分かるだろうと言いたくなります。しかし、公共建築物の入り口では、これが必ず行われているということを知っていただきたいと思います。

2 番目に登録です。必要書類は例えばパスポートだとか、大学の出張証明書とか、フランス人教授の紹介状などがあったほうが、楽に出してもらえます。Rez-de-jardin ではなくて、エスカレーターを降りたところのフロアに受付がありまして、大体何人が待っております。待機番号を取りまして待っております。番号が電光掲示板に示されまると、自分の番号だったら指定された窓口に行きます。いくつかの質問を受けます。どのようなことをやるのかとか、どこから来たのかとかいろいろなことを聞かれます。次に利用証の期間、例えば1年分とか1ヶ月分とか1週間分とか1日とか、申告します。1日は無料です。このようなことで申告しますと、それぞれに応じて、あなたはいくらという金額を言いますので、今度は会計のほうへ行きますと、お金を払いますと領収書がもらえます。それをまた持って先ほどの窓口

へ行って領収書を提示しますと、利用証をもらうことができるわけです。ようやく第1の関門をこれで突破されるわけです。

その次に図書との遭遇と書いています。本当にもう図書との遭遇というのが、私の実感なのです。まず受付横にクロークがありまして、そこにかばんその他を預けます。その際、引き替えのための小判型のチップをもらいます。同時に閲覧室に持ち込む文具、これは鉛筆のみでありまして、ナイフは御法度です。このようなものを入れる透明なビニール製手提げカバンを貸してくれます。パソコンを持ち込む場合は、その旨を言いますと、少し大振りな透明のビニール袋を貸してくれます。ともかくここからいよいよ地下へ下っていくわけです。

下っていきまして、そしてまず大事なことは先ほど申しましたが、座席の登録端末がありますので、ここで予約しておくことです。歴史の人たちは大体Lのところを取りたがりますから、Lはたちまち埋まってしまうのです。ここは国立図書館の一種の性格を表しております。ですから、Lのところが満杯でも、この反対側のUだとかVだとか、このようなところへ行けば、ガラガラなのです。それはどうしてかということ、Lのところに歴史関係の参考図書がズラッと並んでいるわけです。ですから便利は便利なのです。そのようなこともあります。どうしても歴史の研究者はLのところへ集中してしまいます。はじき出されたら別のところに行くということでもあります。

座席に着きますと、机の端に赤いダイオードランプがついておりまして、これが予約席、自分が予約したところであるということがはっきり分かります。それから書名、著者名がはっきりしている場合は、そのまま閲覧室にある端末に今持っている利用証を差し込んで、その目当ての資料を検索してから、請求番号を入力します。これをやりますと、しばらくたちますと、緑色のランプが点滅しますので、「ああ、来たな」ということでカウンターに行って借りるというようなことになっています。

ところが、今から本を探そうという人はどこへ行くかといいますと、区画Xというところがあります。これはなかなかよく考えて作られた番号、アルファベットです。未知数Xですね。ここはカタログ室で、国立図書館が作りました図書目録、またそれ以外の様々な目録が所収

しとあります。また、ここには司書の人たちがいまして、自分はこのようにことをやりたいのだけれども、どうもよく分からないのだというように尋ねますと、この方は非常に親切に教えていただけるようになっております。

コピーのことを書こうと思ってはいたけれども、ちょっと無理でありまして、コピーは大体原則的には不可能に近いだろう。特に私どものような歴史をやっているような資料の場合は、ほぼ不可能に近いだろうと思ったほうが精神衛生上よろしいです。その場合はマイクロを申請します。マイクロを申請する場合は、またこれが大変なのでありまして、原則として2週間といっていますが、実際にいつごろ出てくるかはさっぱり分からないという、ややこしい世界なのであります。

ですから、先ほど申しましたが、日本でできることというのです。この国立図書館の、ここにちょっと、2枚目の右側にネット上の図書館と書いてありますが、BNFと書いてあるのが国立図書館です。さらにBN-OPALE PLUSと書いてありますけれども、これは大体検索の出発点です。ここで検索いたしますと、あらかたのものが分かります。このような書籍があるかないかとか、そのようなことも分かりますし、キーワード検索もできますので、ある程度のものをカバーすることができます。

その次にGallicaと書いてありますが、これは非常に有名なものでありまして、世界中ですでに始まっておりますが、画像サービスです。著作権が切れてネット上でそれを公開することが許されているものに関しましては、ほぼ全ページを画像で入手することができます。Gallicaというのは、わざわざフランスに行かなくても、例えばシャルペローをやりたいと言ったら、代表的な著作だけしかありませんけれども、大体全部手に入ります。このような具合でありまして、我が国の国立国会図書館も明治期の図書に関しましてそのようなことを始めております。フランスもかなり早くからこれに取り組んでおります。

ですから、まず日本でできることをやっておくことです。検索をしておいて、大体どのようなものがあるかということのを頭に置いておけばいいということです。さらにその中でもGallicaを使っておけば、もうわざわざ向こうへ行っってコピーを取ったりするということはない

ということでもあります。このようなことを皆さんの頭の中に置いていただければと思います。要するに日本でできることというのは検索と、つまり見取図をある程度作っておくということです。それからその中でも Gallica で手に入るものは、画像をダウンロードしておく。これは無料でできますから、ダウンロードしておけば、300 ページも 400 ページも自分でダウンロードして、それをプリントアウトしておけばよろしいわけです。

3 番目のところへ行きたいと思います。そのように非常に便利な世界に私どもはいるわけですが、ネット上の図書館あるいは文書館は、実際の図書館を超えられるかというテーマです。恐らく皆さんにとっても電子図書館化とか、いろいろな要請があり、その中で例えば著作権の問題であるとか、そのような問題についてもいろいろ取り組まれていらっしゃるだろうと思います。私の場合に限って申しますと、その問題以外に先ほど申しましたけれども、日本でできることというのはある程度できる。しかし、できないことがある。それは何かというのは、非常に難しいのです。

例えば学生の卒論指導のとき、「先生、わたし、フランスへ行って本を探しに行きたいのですけど」と言われたとします。よほどその学生がテーマを絞り込んでおり、かなりはっきりした方向性が見えていれば、搭乗券渡して、「大変だが、行ってこい」と言います。しかし、ちょこちょこっとフランス語でも読みましようかぐらいの卒論だったなら、日本でやれることはできるから、「日本でできることですませなさい」という指導をすることになります。どうしてもフランスに行かなければならないのは何かというのは、非常に難しい問題でありまして、一番大きいのはやはり、すべてが Gallica に挙がっているわけではないという、ごく単純な問題であります。非常に難しい、細かな領域に入っていきますと、やはり現地に行かないといけないだろうということが一つです。

もう一つは、これだけ便利になったのだから、少し簡単にやればいいではないかというように思われるかもしれませんが、先ほど申しましたけれども、コピーはあまり取らせないのです。ですから、コピーを取る場合でも見開きの状態ではコピーを取らせないのです。

片面ずつしか取らせません。国立図書館では、コピーする専門の人がおります。日がな1日コピーをやっているのですけれども、この人は1ページずつ取ります。私は、それでは2枚分になるから、両面コピーをやってくれと言ったって駄目なのです。なぜかという、本が壊れるからなのです。これも非常に徹底しています。それからここにも書いておきましたけれども、コピーの申請に行きますと、大体駄目という判断がでます。それはやはり保存という要請です。また、非常にコピー機のライトは強いですから、退色してしまうということもその理由の一つです。

そのようなこともありまして、現地に行って、少し腰を落ち着けて、本や資料を読んだ方がよろしい。その上で、私は写経と呼んでいますけれども、手で写すほうが研究の長い目で見るとプラスになるのではないかと思います。手で写している間にも、人間はやはり何かを考えているのです。ただ機械的に写しているのではないのです。人間はコピー機械ではないですから、何かを考えながら写していきまして、だんだんたまってくると、このようなことかなという材料になっていくわけです。私は本当に論文を書いたり、あるいはきちんとしたもので考えていきたいという学生が出た場合、私自身もそうなのですから、そのような場合には少し腰を落ち着けて、ものを見ようとしています。そうしませんと、すぐコピーしたくなるのです。コピーというのはフランスではごく最近になって出てきた文化であって、しかも非常に嫌われているわけでありまして、あまり望ましいものではありません。

4番目に行きましょう。国立図書館とポンピドゥーセンター。分業と有機的結合ということで、やはり日本の将来的な姿の参考として考えるべきではないか、ということを私は申し上げたいのです。まさかどのように本を探したらいいかなどといったような話ばかりでは皆さんにはとても太刀打ちが利きませんので、このようなお話をちょっとさせていただきたいと思います。

フランスではEcole de Chartes 国立古文書学校というところがありまして、毎年大体20人とか30人とかというぐらいいしか取らないのです。この学校の歴史は非常に古いものであります。フランスでは国立の文書館はピラミッド型に出来上がっております。もちろんパリ

にあります国立文書館もありますし、県の文書館があります。さらに市町村です。それぞれに文書館があります。その文書館に、この国立古文書学校卒業生は館長でいきなり行ってしまうのです。そのようなシステムなのです。ですから、1960年代まで図書館でもそうだったのです。図書館長を含む図書館のトップは、ほぼ国立図書館から始まりまして、県の図書館があります。そして市町村の図書館があります。これらすべての、大体指導的な館員といえますか、これは *Ecole de Chartes* の出身者なのです。

古文書学校で何をやっているのかと言いますと、古文書の研究なのです。中世などはそんなにたくさん文書があるわけではありませんから、それを解読しながら、その解釈をしたり、さらに深い研究をする専門家を育てていったのです。その人たちが文書館を運営するのだという考え方です。

ですから、古文書に関する専門的教育が古文書学校に保証されたわけですね。つまり *Ecole de Chartes* を出ている人たちというのは、みんな歴史学をやっていたり、あるいは古文書学をやっていますから、非常に専門性の高い人たちです。これは私は今でも覚えていますけれども、日本で1970年代、日本の文書館設置の問題を巡って、いろいろな歴史学者たちが大きな問題にしていきました。しかし、公文書館は設置されましたが、うまくいっているとは思われません。その問題の一つとは、国立文書館館長は大体お役人の天下りになる。これでは駄目だ。フランスのようにやはり学者がやらないといけないということが、随分主張されたことがあります。そのような議論の前提にあるのが、この *Ecole de Chartes* なのです。先ほども述べましたように、フランスでは図書館も1960年代ぐらいまでは、この *Ecole de Chartes* を出た人たちが図書館体系の中心になっていたわけですね。言ってみれば、知のピラミッドを絵に書いたようなものがここに出来上がっていたわけですね。ですから司書の専門性というのは非常に質の高いものとして、しかも社会的権威の非常に高いものとしてみんなが受け止めていたし、この人たちが図書館行政を行うという考え方だったわけですね。

ところが、ここに大きな問題が一つ出てきました。それはどのよう

なことかという、まずイギリスやアメリカの図書館に比べると、どうしても文科系偏重、歴史偏重のようなところが出てきたわけです。そうしますと理科系の連中がまず怒ったわけです。図書館が図書館の機能を果たしていないではないかという文句が出てきた。それから図書館と文書館は、やはりどうしても機能的に違うのではないかということも出てきました。こうして国立図書館学校というのが、60年代にできるわけです。このような経過で古文書学校から図書館学校が独立していったというわけです。このことは、先ほど回覧しました赤星さんの本に出ておりました。私がそのようなことをよく知っていたわけではありませんで、赤星さんの本をご覧になれば、より詳しく出ております²⁾。

最後に、私はフランス南東部地方のフランス革命の研究を研究しております、その関係もありまして、グルノーブルという町によく行きます。1968年に冬のオリンピックがあったところです。ここの市立図書館がこれなのです。閲覧室は一番てっぺんにあるのですけれども、ちょっと変わった格好をしています。ここは、とても格式の高いところであります。なぜかといいますと、本だけ收藏しているのではないからです。古文書も持っているのです。グルノーブルには、私のようなアンシアンレジーム・革命期のことを研究している人間には、まず県の文書館があります。次にグルノーブル市の文書館もあります。そして図書館と三カ所をえっちらほっちら回っていかないとけないのです。

ですから日本人ならば、1カ所に集めてくれればこのような手間はないのにとってしまうのですけれども、どうも私が見ている限りにおいて、図書館の權威を自分たちで確保するというために、絶対にその文書を他に渡していないという感じがいたします。それがいいことか悪いことかは別ですけれども、それぐらいこの図書館もまた古いわけです。その古い図書館、建物は新しいのですけれども、元々長く歴史を持っているわけです。ただ本だけ持っていただけではバカにされるという何かがあるのです。それは古文書学校と図書館との関係から起因しているのかもしれない。

2) 赤星隆子『フランス近代図書館の成立』理想社、2002年。

この図書館で私がどうしても必要な文書を持っていますから、パリからTGVでグルノーブルに行きますと、またすごいのです。古文書が出てはきます。しかし、コピーは駄目だとちゃんと書いてあります。「すみません、私はフラッシュをたかないから写真を撮らせてください」といっても、写真も駄目だと言うのです。私は三脚を担いでえちらほちらグルノーブルまで来たわけですから、撮らせてくれと、30分ぐらいそこの係員と押し問答をやったわけです。最後に、「じゃあ、ほかに方法はないのか」と言ったら、「マイクロフィルムにするのならよろしい」と言うわけです。図書館でマイクロフィルムを作っているのです。ではお願いしますというので、マイクロを依頼します。

これからが大変なのです。私がパリに戻って1週間ぐらいすれば見積書を送ると言われました。ところが私はそのときは日本に帰っていますから、パリのホテルに頼んでこれを日本に転送してくれと頼みました。日本から今度はその見積書を見て、ではよろしくお願ひしますと返事をしたので、作業にかかってくれたと私は思っていたのです。ところがそれに対してまた返事が来まして、何のために利用するかを明記したあなたの署名入りの書類を送れというわけです。だんだん疲れてきまして、しょうがないからやりました。その書類を送りました。それから今度は向こうの口座にお金を払い込むことになりました。それで初めて現物が来たのです。現物が来たときには、一体何のために私はこのマイクロを作ったのかを忘れてしまっているころになっていました。

私の長い長いお話の最後に、結論的に申しますと、日本でできることは日本でしておいたほうがいい。そしてフランスでしかできないことを、はっきり認識してやるということが一番よろしい。その次に堪忍袋は破れては縫い、破れては縫いでありまして、気を長くしてやらないと研究というのはなかなか進まない。ですから日本のビジネスマンが、「行ってこい」と言って、すぐその日にパスポートを握って向こうへ行行って、すぐ向こうで取引先に会って、その日にまた帰ってくるとか、そのようなものでは、やはり研究はできないというのが、私の率直な感想であります。

最後に、しかしその中でフランスは旧態依然のままの図書館でいい

とは思っていない。やはりいろいろな意味で変わっていかないといけないというように思っています。ただ、私のこれもまた印象で大変申し訳ないのですけれども、ユーザーに目を向けているとは言えない部分が多々あって、どうもまだまだこの苦勞というのは続くのではないか。最終的にはやはりガイドブックを、研究者のためのガイドブックを作らないといけないということを、痛感しております。雑ばくな話で恐縮でございますけれども、終わらせていただきます。